

《世界に紹介された「雪女」は、多摩川上流の伝説》

ラフカディオ・ハーンといえば、日本に帰化し、小泉八雲として、日本文化や文学を海外に紹介したことで有名です。英語で、「津波」のことを「T s u n a m i」として広めたのは、彼の功績です。（注1）

ハーンは、東京帝国大学、早稲田大学で教師をしながら、文筆活動を続けます。（東京帝国大学でのハーンの後任が夏目漱石です。）1904年（明治37）、17編からなる「怪談」を発表。その1編が「雪女」でした。“男が、18歳のとき川の渡しの船頭小屋で雪女に出会った話を、初めて妻に打ち明けたところ、妻は、その雪女だったと告白し子供を残して消え去る”という内容です。

実は、この話は、青梅市から手伝いに来ていた女性から、ハーンが聞いた伝説が基になっていて、多摩川の調布橋（青梅市）のところにあった渡しが舞台の伝説です。ドイツ民話「白雪姫」やディズニー映画「アナと雪の女王」のように、もっと世界に知られればいいですね。それにしても、昔は、現代より、ずっと寒むかったのですね。

さて、この「怪談」がハーンの後作となりました。同年2月には、日露戦争（注2）が始まっており、旅順総攻撃の最中に死去。享年54歳でした。

注1：1897年（明治20）、「A L i v i n g G o d」（生神）という作品を発表。安政南海大地震による津波に襲われた和歌山県広村において、人命救助、津波堤防築造、津波復興に尽力した濱口梧陵（ごりょう、生没年：1820-1855年、湯浅醤油の社長）を紹介したもの。この作品により「T s u n a m i」が世界に広まりました。日本においても、この原作を元に「稲むらの火」という作品が作られ、小学校の教科書に掲載されました。

注2：日露戦争は、満州や朝鮮半島における鉄道敷設を巡る権益争いでもありました。旅順まで鉄道を延伸してきたロシアに対抗し、日本は、ソウルとプサンを結ぶ京釜鉄道を敷設していました。そして、ロシアが旅順までの鉄道を営業開始した段階で、戦争に突入したわけです。日露の勝敗を決定付けたのは、翌年5月の日本海海戦ですが、このとき活躍した戦艦「三笠」などは、イギリスで建造されたものです。その後、日本も戦艦の国産化を図り、列強国間で戦艦建造競争の時代となりました。なお、隅田川に、銀座から石川島に渡る橋を勝鬨橋（かちどきばし）と言いますが、この名前は、旅順陥落祝勝記念として設置された「勝鬨の渡し」に由来します。

写真は、①青梅市の調布橋付近にあるラフカディオ・ハーンと怪談の碑（blog アデロント掲載写真）、②浜口梧稜の像（広川町役場前に建立：内閣府HP掲載写真）

①



②

